

# フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における 属詞構文

—数量的分析から見る繫辞性・動詞性—

上野 貴史

【キーワード】 属詞、非人称用法、自動詞用法、動詞性、繫辞性

## 1. はじめに

古典ラテン語 *similis* を語源とするフランス語 (*Fr.*) *sembler* とイタリア語 (*It.*) *sembrare* は、これらの動詞が取る属詞構文において高い類似性を示す。敦賀(2011)では、*Trésor de la langue française*(1992)の分類を基にフランス語 *sembler* の構文が整理されているが、この敦賀(2011)で示されたフランス語 *sembler* の構文と、*Dizionario Italiano Sabatini Coletti*(1997)から本稿独自にイタリア語 *sembrare* の構文を整理して比較したものが<表1>となる。

<表1: *sembler/sembrare* の属詞構文>

	フランス語	イタリア語
A. 自動詞用法	S <sup>1)</sup> + (IO) + <i>sembler</i> + DP	S + (IO) + <i>sembrare</i> + DP
	S + (IO) + <i>sembler</i> + AP	S + (IO) + <i>sembrare</i> + AP
	S + (IO) + <i>sembler</i> + PP	S + (IO) + <i>sembrare</i> + PP
	S + (IO) + <i>sembler</i> + AdvP	S + (IO) + <i>sembrare</i> + AdvP
	S + (IO) + <i>sembler</i> + Inf	S + (IO) + <i>sembrare</i> + Inf
B. 非人称用法	<i>il</i> <sup>2)</sup> + (IO) + <i>sembler</i> + Inf	(IO) + <i>sembrare</i> + <i>di</i> Inf
	<i>il</i> + (IO) + <i>sembler</i> + <i>que</i>	(IO) + <i>sembrare</i> + <i>che</i>
	<i>il</i> + (IO) + <i>sembler</i> + A + <i>de</i> Inf	(IO) + <i>sembrare</i> + A + Inf
	<i>il</i> + (IO) + <i>sembler</i> + A + <i>que</i>	(IO) + <i>sembrare</i> + A + <i>che</i>

実質的名詞を主語とする自動詞用法においては、フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* は、全く同じ範疇の属詞を後続させており、属詞として形容詞が出現する例としては(1)のような例がある。

(1)

- (1) a. *Fr.*: Une scission me **semble improbable**,... (*Le Monde*: 1988)

a schism mC<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> improbable

「私には分裂は起こりそうにないように思える」

- b. *It.*: La cosa **sembrava inspiegabile**. (*PRACC*)<sup>3)</sup>

the thing seem<sub>PastImp.3Sg</sub> inexplicable

「そのことは説明できないように思われた」

一方、非人称用法は、虚辞主語の有無と、不定詞の前に付く補文標識の *de/di* の分布が異なっている。例えば、不定詞を後続させる場合、(2)のように虚辞主語と補文標識の有無が異なる。

- (2) a. *Fr.*: ; il lui **semblait recommencer** la vie. (*Corpatext*)

EXP him<sub>Dat</sub> seem<sub>PastImp.3Sg</sub> restart<sub>Inf</sub> the life

「彼は人生をやり直しているような気がしていた」

- b. *It.*: Eppure mi **sembra di poter** scorgere il nome,... (*MONITOR*)

yet mC<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> di can<sub>Inf</sub> discern<sub>Inf</sub> the name

「しかし、私はその名前を見分けることができるように思える」

しかし、フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* ではこのような虚辞主語の有無と補文標識の相違があるものの、これ以外はほぼ同じような属詞が後続する。

本稿では、このようなほぼ同じ属詞を後続させるフランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* に関して、後続させる属詞の出現頻度を数量的に調査することにより、その類似点と相違点を指摘することを目的としている。フランス語 *sembler* のコーパスに関しては、敦賀(2011)で調査されている数量的分析に加えて、*Lextutor French Corpus* (LFC) から独自にコーパスを収集する。また、イタリア語 *sembrare* に関しては、*CORIS Corpus* からコーパスの収集を行う。このように収集したコーパスの属詞の使用分布を数量的に分析することにより、フランス語 *sembler* が動詞的であり、イタリア語 *sembrare* が繫辞的特徴を示すということ明確にしていく。

## 2. フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における属詞構文の分布

### 2.1. フランス語 *sembler* の属詞構文

敦賀(2011)は、*Le Monde*(1994)と *Frantext*(1993-1997)をコーパスとして利用し、フランス語 *sembler* における各構文での出現数を調査している。この中で、本稿に関係するものは887例となるが、本稿では新たに LFC から809例のデータを収集し、その出現数を調査してみた<sup>4)</sup>。

まず、自動詞用法と非人称用法の分布は<表2>のようになる。

<表 2：自動詞用法と非人称用法の分布 (*sembler*) >

	敦賀(2011)	LFC	計
自動詞用法	698 (78.7%)	627 (77.5%)	1325 (78.1%)
非人称用法	189 (21.3%)	182 (22.5%)	371 (21.9%)
計	887	809	1696

自動詞用法と非人称用法の分布は、敦賀(2011)・LFCともほぼ同じ割合で出現しており、フランス語 *sembler* の自動詞用法の使用割合が約8割を占め、自動詞用法の優位性が認められる。

次に、自動詞用法における *sembler* に後続する属詞の語彙範疇の使用分布を示したものが<表 3>となる。

<表 3：自動詞用法における属詞 (*sembler*) >

自動詞用法	敦賀(2011)	LFC	計
S + (IO) + V + DP	25 ( 3.6%)	38 ( 6.1%)	63 ( 4.8%)
S + (IO) + V + AP	286 (41.0%)	228 (36.4%)	514 (38.8%)
S + (IO) + V + PP	34 ( 4.9%)	29 ( 4.6%)	63 ( 4.8%)
S + (IO) + V + AdvP	2 ( 0.3%)	1 ( 0.2%)	3 ( 0.2%)
S + (IO) + V + Inf	351 (50.3%)	331 (52.8%)	682 (51.5%)

*sembler* に後続する属詞に関しては、(3)のような Inf(51.5%)と(4)のような AP(38.8%)で9割を超える出現率となっている。

- (3) Elle **semblait** avoir réussi. (Le Monde: 1988)

she seem<sub>PastImp.3Sg</sub> have<sub>Inf</sub> succeed<sub>PastP</sub>

「彼女は成功したようであった」

- (4) M. Bolloré **semble** le plus isolé. (Le Monde: 1988)

Mr. Bolloré seem<sub>Pres.3Sg</sub> the most isolated

「ボロレ氏が最も孤立しているようである」

続いて、非人称用法における属詞の語彙範疇の出現率を示したものが<表 4>となる。

&lt;表 4：非人称用法における属詞の語彙範疇の出現率(sembler) &gt;

非人称用法	敦賀(2011)	LFC	計
<i>il</i> + (IO) + V + Inf	22 (11.6%)	39 (21.4%)	61 (16.4%)
<i>il</i> + (IO) + V + <i>que</i>	151 (79.9%)	135 (74.2%)	286 (77.1%)
<i>il</i> + (IO) + V + A + <i>de</i> Inf	12 ( 6.3%)	3 ( 1.6%)	15 ( 4.0%)
<i>il</i> + (IO) + V + A + <i>que</i>	4 ( 2.1%)	5 ( 2.7%)	9 ( 2.4%)

非人称用法における *sembler* に補文を直接後続させる構文では、(5)のような非定形節(16.4%)よりも圧倒的に(6)のような定形節(77.1%)が多く見られる。

(5) ..., il lui **sembloit** avoir vu toutes les chauves-souris de la terre,... (Corpatext)

EXP him<sub>Dat</sub> seem<sub>PastSimp.3Sg</sub> have<sub>Inf</sub> see<sub>PastP</sub> all the bats of the earth

「彼は地上にいるすべてのコウモリを見たような気がしていた」

(6) Là il me **sembloit** que tout le monde me regardait. (Corpatext)

there EXP me<sub>Dat</sub> seem<sub>PastSimp.3Sg</sub> that all the world me<sub>Acc</sub> watch<sub>PastImp.3Sg</sub>

「まさしく世界中が私を見ているように私には思えた」

以上のことから、フランス語 *sembler* の属詞構文に関して、次のことが指摘できると思われる。

- 自動詞用法と非人称用法の分布はおおよそ8:2であり、自動詞用法が主たる用法となる。
- 自動詞用法における属詞は、Infが最も多く、次にAPが多く出現し、この二つの語彙範疇で全体の9割を超える。
- 非人称用法において、後続する定形節と非定形節の分布はおおよそ8:2であり、定形節が圧倒的に多く使用される。

次節では、このようなフランス語 *sembler* の属詞構文における分布をイタリア語 *sembrare* と比較することにより、その類似点・相違点を探っていくことにする。

## 2.2. フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における属詞構文の数量的分析

イタリア語に関しては、Università di Bologna から提供されている *CORIS Corpus* から988例の用例を収集した。

まず、自動詞用法と非人称用法の分布を集計し、フランス語 *sembler* と比較したものが表5となる。

<表 5 : 自動詞用法と非人称用法の分布 (*sembler/sembrare*) >

	フランス語 <i>sembler</i>	イタリア語 <i>sembrare</i>
自動詞用法	1325 (78.1%)	779 (78.8%)
非人称用法	371 (21.9%)	209 (21.2%)
計	1696	988

2.1. 節で見たように、フランス語 *sembler* の自動詞用法と非人称用法の使用割合はおおよそ8:2であったが、イタリア語 *sembrare* もほぼ同じような分布で使用されており、自動詞用法が主要な用法となっている。

この自動詞用法における属詞の語彙範疇の出現率を示したものが<表 6 >となる。

<表 6 : 自動詞用法における属詞の語彙範疇の出現率 (*sembler/sembrare*) >

自動詞用法	フランス語 <i>sembler</i>	イタリア語 <i>sembrare</i>
S + (IO) + V + DP	63 ( 4.8%)	201 (25.8%)
S + (IO) + V + AP	514 (38.8%)	284 (36.5%)
S + (IO) + V + PP	63 ( 4.8%)	27 ( 3.5%)
S + (IO) + V + AdvP	3 ( 0.2%)	6 ( 0.8%)
S + (IO) + V + Inf	682 (51.5%)	261 (33.5%)

フランス語 *sembler* に後続する属詞は、Inf と AP で9割を超える出現率となっていたが、イタリア語 *sembrare* においては、AP(36.5%) ((7))、Inf(33.5%) ((8))、DP(25.8%) ((9))という順序で出現頻度が高くなっており、フランス語と異なり属詞として名詞が多く使用されている。

(7) Il suo travestimento mi **sembra adatto**. (NARRAT)

the his disguise me<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> suitable

「私には彼の変装は似合っているように思える」

(8) Quella voce **sembrava innalzarsi** dalla profondità degli spazi siderali. (NARRAT)

that voice seem<sub>PastImp.3Sg</sub> raise<sub>Inf</sub> from.the depth of.the space sidereal

「あの声は星々のある宇宙空間の底から湧き上がってきたように思えた」

- (9) Quindi la filosofia mi **sembra** un esercizio molto interessante,... (STAMPA)

therefore the philosophy me<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> a exercise very interesting

「それ故、私には哲学が大変興味深い務めであるように思えるのだ」

このイタリア語 *sembrare* が属詞として名詞を多く後続させることについては、次節で考察を行うことにする。

本節の最後として、非人称用法における後続する属詞の出現率を示したものが<表7>となる。

<表7>：非人称用法における属詞の語彙範疇の出現率 (*sembler/sembrare*)

非人称用法	フランス語 <i>sembler</i>	イタリア語 <i>sembrare</i>
<i>il</i> + (IO) + V + Inf/ (IO) + V + <i>di</i> Inf	61 (16.4%)	40 (19.1%)
<i>il</i> + (IO) + V + <i>que</i> / (IO) + V + <i>che</i>	286 (77.1%)	141 (67.5%)
<i>il</i> + (IO) + V + A + <i>de</i> Inf/ (IO) + V + A + Inf	15 ( 4.0%)	15 ( 7.2%)
<i>il</i> + (IO) + V + A + <i>que</i> / (IO) + V + A + <i>che</i>	9 ( 2.4%)	13 ( 6.2%)

<表7>から、非人称用法における繰り上げ動詞に後続する補文は、フランス語 *sembler* もイタリア語 *sembrare* も、(10)のような非定形節よりも(11)のような定形節が多く使用されていることが分かる。

- (10) a. Fr.: ...il me **semblait** voir distinctement les formes. (Corpatext)

EXP me<sub>Dat</sub> seem<sub>PastImp.3Sg</sub> see<sub>Inf</sub> distinctly the forms

「私にはその形状がはっきりと分かるように思えた」

- b. It.: Già mi **sembra** di leggere sui giornali: (STAMPA)

already me<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> di read on.the newspapers

「もう私は新聞で読んだように思う」

- (11) a. Fr.: ; et il me **semblait** que cette eau glissait de gauche à droite,... (Corpatext)

and EXP me<sub>Dat</sub> seem<sub>PastImp.3Sg</sub> that his water slide<sub>PastImp.3Sg</sub> from left to right

「そして私にはこの水が左から右へゆっくりと流れているように思えた」

- b. It.: ..., anche se mi **sembra** che tu già le conosca tutte. (MONITOR)

also if me<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> that you already them<sub>Acc</sub> know<sub>Cong.2Sg</sub> all

「君が彼女たちの全てを既に知っているように私には思えたとしても」

定形節と非定形節の比率を見ると、フランス語 *sembler* が定形節を多用するのに対し、イタリア語 *sembrare* が多少非定形節を好むという傾向が見られるが、それ程有意差があるわけではない。

補部に形容詞を持つ構造においては、フランス語 *sembler* が非定形節を多用し、イタリア語 *sembrare* が非定形節・定形節ともに同じような頻度で使用されているが、全体としてコーパスの数が少ないため断定的なことは避けておく。

- (12) a. *Fr.*: ..., tant il **sembla** difficile de se dérober plus longtemps à la police du marquis  
 so.much EXP seem<sup>PastImp.3Sg</sup> difficult de shirk<sup>Inf</sup> more for.long.time to the police of.the marquis  
 et de son fils Ascagne. (*Corpatext*)  
 and of his son Ascagne

「かなりの長期間に渡って侯爵や彼の息子であるアスカーニュの治安から逃れることは大変難しいように思えた」

- b. *It.*: Le **sembrava** quasi inutile continuare quella conversazione. (*NARRAT*)

he<sup>Dat</sup> seem<sup>PastImp.3Sg</sup> almost useless continu<sup>Inf</sup> that conversation

「あのような会話を続けることはほとんど役に立たないと彼女には思えた」

- (13) a. *Fr.*: ..., tant il lui **sembla** ridicule que des Chouans se hasardassent  
 so.much EXP him<sup>Dat</sup> seem<sup>PastImp.3Sg</sup> ridiculous that some Chouans take<sup>Cong.PastImp.3Pl</sup> the.risk  
 au milieu d'Alençon,... (*Corpatext*)  
 to.the center of-Alençon

「ふくろう党の人達が危険でありながらアランソンの中央に行ったことは彼にはかなり滑稽に思えた」

- b. *It.*: ..., e **sembrava** probabile che Janet Harrison l'avesse scelto per questo motivo.

and seem<sup>PastImp.3Sg</sup> probable that Janet Harrison it<sup>Acc</sup>-have<sup>Cong.PastImp.3Sg</sup> choose<sup>CPastP</sup> for this reason

「ジャネット・ハリソンがこの理由でそれを選んだというのにはあり得るように思えた」

(*NARRAT*)

以上のフランス語 *sembler* の構文とイタリア語 *sembrare* の構文の数量的考察から、以下のことが指摘できると思われる。

- 自動詞用法における属詞に関して、フランス語 *sembler* は Inf と AP で 9 割を超えるが、イタリア語 *sembrare* は Inf と AP に加えて DP での出現が多く見られる。
- 非人称用法に関しては、フランス語・イタリア語共に非定形節よりも定形節が多く使用されており、その割合はほぼ 2 (非定形節) : 8 (定形節) となる。

### 3. *sembler* と *sembrare* の相違点

本節では、数量的調査に見られたフランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* の相違点について更に詳細に考察を加えていく。

#### 3.1. DP の属詞構文

フランス語・イタリア語属詞動詞の自動詞用法において、DP の分布が異なるということの前節で見たが、フランス語とイタリア語での属詞の分布にこのような違いが生じる理由としては、自動詞用法においてイタリア語 *sembrare* にはフランス語 *sembler* にはない意味を有しているということが考えられる。

Rooryck(1997)には、繰り上げ動詞の主要な意味素性は comparison 「比較・類似」であり、多くの言語で comparison を表す動詞と繰り上げ動詞の語幹は等しいという指摘が見られる<sup>5)</sup>。フランス語においても、comparison を意味する *ressembler* と繰り上げ動詞 *sembler* は同じ語幹から形成されている。イタリア語の comparison を意味する *somigliare* は、一見 *sembrare* と異なるように見えるが、その語源は *sembrare* と *simulare* ‘simulate’ の二重語であり、やはり comparison を意味するものから形成されている。このように、多くの言語の繰り上げ動詞は comparison という意味を主要な素性として有していると考えられるのではあるが、実際には、現代フランス語 *sembler* には「～に似ている」という意味が欠けている<sup>6)</sup>。一方、イタリア語 *sembrare* には、自動詞用法として「～に似ている」という意味が存在し、(14)のように、その文は属詞として DP が出現する。このようにフランス語 *sembler* にはない「～に似ている」という用法がイタリア語 *sembrare* にあるということが、DP の語彙範疇の出現率を高めている可能性がある<sup>7)</sup>。

(14) a. ...la sua voce non mi **sembra la mia**,... (MONITOR)

the his voice not me<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> the mine

「彼の声は私のと似ていない」

b. ..., e nella mano sinistra ha una borsa nera che **sembra una valigetta da medico**.

and in.the hand left have<sub>Pres.3Sg</sub> a bag black that seem<sub>Pres.3Sg</sub> a small.suitcase for doctor

「(彼は) 左手に医療用ケースに似た黒い鞆を持っている」 (MONITOR)

#### 3.2. 属詞としての Inf

前節のフランス語が属詞として DP の割合が低いということに関連して、フランス語 *sembler* (51.5%) はイタリア語 *sembrare* (33.5%) と比較して、Inf を属詞に取る割合が高いということがあ。このことを考察するために、まず、自動詞用法の基底構造について考えてみたい。

拙稿(2014, 2015, 2020)では、*sembler/sembrare* の自動詞用法における基底構造を(15)のように設定している。

(15) [<sub>VP</sub> *sembler/sembrare* [<sub>AgrP</sub> [<sub>Subj</sub> DP] [<sub>Agr</sub> Agr [<sub>Pred</sub> Inf/DP/AP/PP/AdvP]]]]

(15)は、属詞動詞の補部がXバー理論に基づく非対称的なAgrを主要部とする小節構造<sup>8)</sup>から構成されており、このAgrPが*sembler/sembrare*と併合していることを示している。この基底構造から、小節主語(Subj)DPが主節に繰り上がることにより自動詞用法の属詞構文が派生されることが考えられる。この構造は、フランス語 *être*・イタリア語 *essere* という繫辞(copula)が持つ構造と同じであり、この意味で*sembler/sembrare*は一種の繫辞動詞と位置づけられる<sup>9)</sup>。このような基底構造が正しいとすると、*sembler/sembrare*が直接属詞として持つのは、小節述語(Pred)のINF/DP/APなどの小節の一部ではなく小節全体となり、小節述語自体を属詞として持つのはAgrPの主要部であるAgrということになる。このAgrは音形のない一致などの統語操作を行う一種の機能範疇と想定されるが、Infが小節述語でない場合は、Agrは繫辞と同様の機能を果たしていると考えられる。例えば、小節述語にAPが出現するような(16)においては、主語DPと述語APとの一致はこのAgrによるものとなる。

(16) a. *Fr.*: Les résultats **semblent probants**. (ECRIT)

the results<sub>Pl</sub> seem<sub>Pres.3Pl</sub> convincing<sub>Pl</sub>

「その成果は確かなように思える」

b. *It.*: Questi guasti **sembrano casuali**... (EPHEM)

these damage<sub>SPl</sub> seem<sub>Pres.3Pl</sub> accidental<sub>Pl</sub>

「これらの損害は偶発的なものに思える」

(16)における小節述語APである*probants/casuali*(複数)が小節主語DPである*les résultats/questi guasti*(複数)に一致するのは、繫辞的なAgrによるものと考えられる。他方、小節述語にInfが出現するものは、このような一致とは無関係であり、小節のAgrが機能しているとは言い難い。それは、(17a)のようなInfが属詞である自動詞用法は、定形節が後続する(17b)のような非人称用法から派生するという考え方ができるように(大野: 1977)、Infが属詞である文は小節構造から派生しないことから理解できる。

- (17) a. Françoise **semble** avoir mangé des gâteaux. (大野 1977: 1、一部改変)

Françoise seem<sub>Pres.3Sg</sub> hav<sub>CInf</sub> eat<sub>PastP</sub> some cakes

- b. Il **semble** que Françoise ait mangé des gâteaux.

EXP seem<sub>Pres.3Sg</sub> that Françoise have<sub>Cong.Past.3Sg</sub> eat<sub>PastP</sub> some cakes

「フランソワはケーキを食べたようだ」

このことは、Infが後続する自動詞用法は、これが例え小節構造から派生するとしても、その小節に繫辞的な Agr を必要としないということの意味しており、属詞動詞自体も繫辞的性質を帯びるのではなく動詞的であると言うことができると思われる。フランス語 *sembler* に後続する Inf の割合(51.5%)がイタリア語 *sembrare* (33.5%) よりもかなり高い割合で出現するということは、フランス語 *sembler* が繫辞的 (copulanness) ではなく動詞的 (verbness) であるという指摘が可能であると考えられる。このことは、フランス語 *sembler* は倒置構造を許容しないということにも関連すると思われるが、このことについては別稿に委ねたい。

### 3.3. 定形節の非人称用法

自動詞用法とは異なり、非人称用法は定形節・非定形節が属詞となる形式である。定形節が属詞となる場合、補文標識が補文と併合する。

- (18) [<sub>CP</sub> *que/che* [<sub>TP</sub> DP [<sub>VP</sub> VP]]]

そして、この CP が *sembler/sembrare* と併合する。

- (19) [<sub>VP</sub> *sembler/sembrare* [<sub>CP</sub> *que/che* [<sub>TP</sub> DP [<sub>VP</sub> VP]]]]

そして更に、この後、フランス語の場合、虚辞代名詞 *il* が出現することになる。同様に、非定形補文の場合は、フランス語  $\varphi$ ・イタリア語 *di* という補文標識が TP と併合し((20))、これが属詞動詞と併合する((21))。

- (20) [<sub>CP</sub>  $\varphi/di$  [<sub>TP</sub> PRO [<sub>VP</sub> VP]]]

- (21) [<sub>VP</sub> *sembler/sembrare* [<sub>CP</sub>  $\varphi/di$  [<sub>TP</sub> PRO [<sub>VP</sub> VP]]]]

そして、定形補文と同様、フランス語の場合、主節に虚辞代名詞 *il* が出現する。このように、定

形節・非定形節とも、これらの属詞は属詞動詞の非対格補文となり、自動詞用法の小節構造とは大きく異なる。

ここで、このように派生する非人称用法の補文内の構造と自動詞用法との関係を考察するため、非人称用法の定形補文内の構造を調査したものが<表8>となる<sup>10)</sup>。

<表8：定形補文内の構造>

定形補文	フランス語 <i>sembler</i>	イタリア語 <i>sembrare</i>
S + VP	113 (86.9%)	111 (78.7%)
S + <i>être/essere</i> + XP <sup>11)</sup>	17 (13.1%)	30 (21.3%)
計	130 <sup>12)</sup>	141

いずれの言語においても繫辞ではなく、(22)のようなVPという構造が補文内に多く見られる。

- (22) a. *Fr.*: Il **semble** que ces dépenses n'ont jamais été inscrites au budget national,...
- EXP seem<sub>Pres.3Sg</sub> that these expenses not-have<sub>Pres.3Pl</sub> never bc<sub>PastP</sub> inscribe<sub>PastP</sub> to.the budget national
- 「これらの支出は国家予算に一度も記入されなかったと思われる」 (*Le Monde*: 1988)
- b. *It.*: Qui **semberebbe** che Mosè ed Elia spieghino a Gesù ciò che sta per accadere.
- here seem<sub>Cond.Pres.3Sg</sub> that Mosè and Elia explain<sub>Cong.Pres.3Pl</sub> to Gesù that that stay<sub>Pres.3Sg</sub> for occur
- 「ここで、まさに出現することをモーゼとエリアがイエスに教えたのだと思われる」
- (*MONITOR*)

このような非人称用法は、3.2.節でも述べたように、Infを属詞とする自動詞用法として書き換えることが可能である。

- (23) a. *Fr.*: Ces dépenses **semblent** n'avoir jamais été inscrites au budget national.
- b. *It.*: Qui Mosè ed Elia **semberebbero** spiegare a Gesù ciò che sta per accadere.

(23)のような属詞にInfを取る自動詞用法は、フランス語 *sembler* で多く出現し、この意味においてフランス語 *sembler* が動詞的であるという指摘を3.2.節で行った。書き換えが可能となる(22)のような非人称用法において、定形節内に繫辞ではなくVPがフランス語に多く出現するというのも(*Fr.*: 86.9%、*It.*<sup>13)</sup>: 78.7%)、フランス語 *sembler* が繫辞的でなく動詞的特性を有しているということが言えると思われる。

### 3.4. 非人称用法における与格

定形節・非定形節を属詞とする構造においては、与格が出現する場合と出現しない場合がある。この与格の意味役割は、定形節と非定形節では大きく異なる。非定形節の場合は、不定詞とその主語としての与格とで命題(proposition)を形成し、全体として Theme(主題)の意味役割( $\theta$ -role)を示す。

(24) a. *Fr.*: ..., il lui **sembra** entendre des hennissements de chevaux. (Corpatext)

EXP him.Dat seemPastSimp.3Sg hearInf some neighs of horses

「彼は馬のいななきが聞こえたように思えた」

b. *It.*: Mi **sembra** di essere arrivato ieri a Mieza. (NARRAT)

mCDat seemPres.3Sg di beInf arrivarCPastP yesterday at Mieza

「私は昨日ミエザに到着したようだ」

(24)の与格代名詞 *lui/mi* は、それぞれ *entendre/essere arrivato* の主語であり、全体で Theme の意味役割を示している。このような非定形節が属詞となる構造を一般的に示すと(25)のようになる。

(25) *sembler/sembrare* (Theme(Proposition))

この Theme は、非定形節である述部と、与格で示される意味上の主語で構成されるため、与格は義務項となる。このような非定形節が属詞となる構造における与格の有無を調査したものが <表9>となり、フランス語(78.7%)・イタリア語(67.5%)とも、与格が出現する構造が多用されていることが分かる。

<表9：非定形節における与格>

非定形節	フランス語 <i>sembler</i>	イタリア語 <i>sembrare</i>
<i>il + IO + V + Inf/ IO + V + di Inf</i>	48 (78.7%)	27 (67.5%)
<i>il + V + Inf/ V + di Inf</i>	13 (21.3%)	13 (32.5%)
計	61	40

一方、定形節に与格が出現する構造には(26)のようなものがある。

(26) a. *Fr.*: ; il me **sembla** que le jour se levait! (Corpatext)

EXP me<sub>Dat</sub> seem<sub>PastSimp.3Sg</sub> that the day se raise<sub>PastImp.3Sg</sub>

「太陽が昇っていたように私には思えたんだよ」

b. *It.*: Non ci **sembra** che le cose vadano bene. (STAMPA)

not us<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> that the things go<sub>Cong.Pres.3Sg</sub> well

「物事がうまくいっていたようには我々には思えない」

このような構造では、定形節である命題が Theme となり、与格は Experiencer(経験者)の意味役割を示す。この構造を一般的に示すと(27)のようになる。

(27) *sembler/sembrare* (Experiencer, Theme(Proposition))

これに対して、(28)のような与格が出現しない構造は、非定形節が後続する(25)と同じく Theme だけを意味役割として持つ。

(28) a. *Fr.*: ..., il **semble** qu'un véritable déclic se soit produit dans la société. (*Le Monde*: 1988)

EXP seem<sub>Pres.3Sg</sub> that-a real stimulus se be<sub>Cond.Pres.3Sg</sub> happen<sub>PastP</sub> in the society

「本当のひらめきが社会の中で生じたようだ」

b. *It.*: **Sembrava** che le campane della città sonassero per loro,... (NARRAT)

seem<sub>PastImp.3Sg</sub> that the bell of.the city ring<sub>Cong.PastImp.3Pl</sub> for them.<sub>Acc</sub>

「街の鐘が彼らのために鳴っているかのようだった」

このような定形節が後続する構造における与格の有無を調査したものが<表10>となる。

<表 10 : 定形節における与格>

定形節	フランス語 <i>sembler</i>	イタリア語 <i>sembrare</i>
<i>il + IO + V + que/ IO + V + che</i>	189 (66.1%)	41 (28.9%)
<i>il + V + que/ V + che</i>	97 (33.9%)	101 (71.1%)
計	286	142

このような与格出現の有無の結果は、フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* とで対照的であり、フランス語では与格が出現する構造が多く(66.1%)、イタリア語では与格を伴わない構造が多く出現する(71.1%)。このようにフランス語 *sembler* が与格を伴う構造として多く出現する要

因としては、フランス語 *sembler* と *croire* タイプ動詞との類似性ということを挙げる事ができると思われる。基本的に *croire* タイプ動詞は、(29)のように、定形節である Theme と、主格の主語 *Pierre* を伴った構造で現れる。

(29) Pierre **croit** que la fin du monde est proche. (Ruwet 1972: 189)

Pierre believe<sub>Pres.3Sg</sub> that the end of.the world bc<sub>Pres.3Sg</sub> near

「ピエールは世界の終わりが近いと信じている」

このように *croire* タイプ動詞の主語が主格で出現するのに対して、定形節が後続する *sembler* は、(30)のように、意味上の主語が与格として現れるが、構造的に両動詞の構文に意味的な相違は見られない。

(30) Il me **semble** que le coût de la vie a augmenté. (Ruwet 1972: 189)

EXP mC<sub>Dat</sub> seem<sub>Pres.3Sg</sub> that the cost of the life have<sub>Pres.3Sg</sub> increase<sub>PastP</sub>

「私は生活費が上昇しているように思える」

このように、主語の格という点で相違点は見られるものの、構造的には、*sembler* は *croire* タイプ動詞と同じものと見なすことが可能であると思われる。

(31) a. [<sub>Subj</sub> DP<sub>Nom</sub> [<sub>VP</sub> croire [<sub>CP</sub> que...]]]

b. [<sub>Subj</sub> DP<sub>Dat</sub> [<sub>VP</sub> sembler [<sub>CP</sub> que...]]]

(31a)で示した *croire* の構造が *que* 節を目的語とする他動詞構造であることを考えると、これに類似するフランス語 *sembler* も非人称構造ではなく他動詞的構造として捉えることが可能になる。フランス語 *sembler* は与格を伴う定形節の構造が数量的にも優勢であることから、フランス語 *sembler* が動詞的であるということがここにおいても指摘できると思われる。

一方、フランス語 *sembler* と異なり、イタリア語 *sembrare* は与格を伴わない構造での出現頻度が高い。これは、主語を伴わない、意味役割として命題である Theme だけを後続させる(32)のような非人称構造であると言える。

(32) [<sub>VP</sub> sembrare [<sub>CP</sub> che...]]

このような非人称構造は、(33)のような非対格動詞の構造と類似する。

- (33) ..., ma **bastava**        che lui parlasse        di qualunque altra cosa...        (*NARRAT*)  
           but be.sufficient<sup>PastImp.3Sg</sup> that he speak<sup>Cong.PastImp.3Sg</sup> of any        other thing  
           「彼は何か他のことについて話すだけで十分だった」

(33)は、非対格動詞 *bastare* に定形節が後続する例となる。このような非対格動詞と、定形節が後続するイタリア語 *sembrare* は、同じ基底構造から派生するものと考えられる。イタリア語 *sembrare* は与格を伴わない構造が頻度的にも主たる構文であるということから、定形節を後続させるイタリア語 *sembrare* は非人称・非対格構造であるということが指摘できる。

#### 4. 結語

本稿では、ほぼ同じ属詞を後続させるフランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* に関して、後続させる属詞の頻度を数量的に調査することによりこれらの相違点を考察した。

まず、両言語における自動詞用法と非人称用法について、数量的分析から以下のことが指摘できる。

- (34) a. 自動詞用法と非人称用法の分布はおおよそ 8:2 であり、自動詞用法が主たる用法となる。  
       b. 自動詞用法における属詞に関して、フランス語 *sembler* は Inf と AP で 9 割を超えるが、イタリア語 *sembrare* は Inf と AP に加えて DP での出現が多く見られる。  
       c. 非人称用法において、後続する定形節と非定形節の分布はおおよそ 8:2 であり、定形節が圧倒的に多く使用される。

この(34b)で指摘したイタリア語 *sembrare* が属詞として DP を多く取ることに関しては、フランス語 *sembler* には「～似ている」という意味を有していることがその一因であることが考えられる。また、フランス語 *sembler* に後続する Inf の割合(51.5%)がイタリア語 *sembrare*(33.5%)よりもかなり高い割合で出現するという事は、フランス語 *sembler* が繫辞的ではなく動詞的であるということも同時に指摘できる。

次に、フランス語 *sembler* の非人称用法において、定形節内に繫辞ではなく VP の出現割合が高い(*Fr.*: 86.9%、*It.*: 78.7%)ということから、フランス語 *sembler* が繫辞的でなく動詞的特性を有しているという指摘を行った。

また、フランス語では定形節が後続する非人称用法において、与格が出現する構造が多く出現し(66.1%)、イタリア語では与格を伴わない構造が多く出現する(71.1%)ことに関して、フランス語 *sembler* が他動詞構造、イタリア語 *sembrare* が非人称・非対格構造であることも指摘した。

以上、数量的にフランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* を考察した結果、フランス語

*sembler* が繫辞的ではなく動詞的であること、そしてイタリア語 *sembrare* が自動詞用法で繫辞的、非人称用法で非対格的な傾向があることが分かる。このような動詞性の違いが、後続する属詞の出現頻度に表れているということが指摘できると思われる。

**付記** 本稿は、2020年9月5日、広島大学文学部で開催された第50回西日本言語学会において「フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における属詞構文」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

### <註>

- 1) 本稿で使用するグロスは次の通り。S：主語、IO：間接目的語、DP：決定詞句、CP：補文標識句、TP：時制句、A：形容詞、P：前置詞、Adv：副詞、2：二人称、3：三人称、女性：Fem、Sg：単数、Pl：複数、Nom：主格、Acc：対格、Dat：与格、Gen：属格、Pres：現在形、Past：過去形、PastImp：半過去形、PastSimp：単純過去形、Inf：不定詞、PastP：過去分詞、Cong：接続法、Cond：条件法、EXP：虚辞代名詞。
- 2) 虚辞代名詞が以下の例のように *il* ではなく *cela* で出現することもある。
  - i) La crise économique et financière en Asie est plus grave que cela semblait être  
 the crisis economic and financial in Asia b<sup>CPres.3Sg</sup> more serious than *cela* seem<sup>PastImp.3Sg</sup> b<sup>CInf</sup>  
 le cas au début,... (Le Monde: 1988)  
 the case at first  
 「アジアにおける経済・財政危機は、当初考えられていた以上に深刻である」
- 3) *CORIS Corpus* おけるサブカテゴリーは次の通り。*EPHEM*：エフェメラ、*MONITOR*：モニターコーパス、*NARRAT*：小説・物語、*PRACC*：学術論文、*STAMPA*：新聞・雑誌。
- 4) 本稿では書き言葉を扱うため、LFCでは“Le Monde”, “Ecrit”, “Corpatext”のサブコーパスから用例を収集した。
- 5) Rooryck (1997: 16) では、オランダ語 *lijken* ‘seem’/*vergelijken* ‘compare’、スペイン語 *parecer* ‘seem’/*compare* ‘compare’などを例として挙げている。
- 6) 古フランス語の辞書である *Dictionnaire historique de l’ancien langage François* (1972) には、*sembler* の意味に *ressembler* が記載されている。
- 7) 見かけの判断の「～見える」と類似の「～似ている」は、意味の上で非常に類似する概念であるため、*sembrare* がどちらの用法で使用されているかを数量的に示すことは困難である。
- 8) Bowers (1993) や den Dikken (1994) などで提案されている構造である。
- 9) Jones (1996) などを参照のこと。
- 10) フランス語は LFC からのデータのみを調査している。

11) XP には、フランス語が NP (8例: 47.1%)、AP (7例: 5.9%)、PP (1例: 5.9%)、AdvP (1例)、イタリア語が NP (13例: 43.3%)、AP (8例: 26.7%)、PP (7例: 23.3%)、Adv (1例: 3.3%) が出現している。

12) i) のような定形節が省略されている3例と、ii) のような補文内が *oui* として出現している2例は分析から除外した。

i) Il me **semble** que sa marquise... (Corpatext)

EXP mCDat seemPres.3Sg that her mark

「私には彼女のあざが~のように思える」

ii) Il **semblerait** que oui. (Le Monde: 1988)

EXP seemCond.Pres.3Sg that yes

「そう思うよ」

13) 定形節が後続するイタリア語の非人称用法では、補文内の主語が主節の主語位置に繰り上がることが可能である。

i) ...perché circa 50 mila euro al mese non mi **sembra** che siano pochi... (MONITOR)

because about 50 thousands euro to.the month not meDat seemPres.3Sg that beCong.Pres.3Pl little

「月に約 50,000 ユーロが少ないとは私には思えない」

i) は、補文内の主語である *circa 50 mila euro* が主節に繰り上がっている。このことは、この主語の複数という素性が主節動詞 *sembra* (単数) と一致せず、従属節動詞 *siano* (複数) と一致していることから理解できる。

## <コーパス>

CORIS Corpus, Università di Bologna. (<http://corpora.dslo.unibo.it/TCORIS/>)

Lextutor French Corpus (<https://www.lex Tutor.ca/conc/fr/>)

## <参考文献>

Amary, Valérie (2019) “Copular Sentences and Binding Theory: The Case of French and Principle C”, *Corela* 17-1, 1-32.

Abeillé, Anne (1988) “Verbes «à montée» et auxiliaires dans une grammaire d'arbres adjoints”, *Revue des linguistes de l'université Paris X Nanterre* 39, 1-38.

Baptiste, Jean & La Curne de Sainte-Palaye (1972) *Dictionnaire historique de l'ancien langage François ou Glossaire de la langue Française IX R-S*, Georg Olms Verlag.

Belletti, Adriana (2004) “Aspects of the Low IP Area”, in Rizzi, Luigi (ed.) *The Structure of CP and IP*, Oxford University Press, 16-51.

- Belletti, Adriana & Luigi Rizzi (1988) "Psych-Verbs and  $\theta$ -Theory", *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
- Bowers, John (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24-4, 591-656.
- Cardinaletti, Anna (2004) "Toward a Cartography of Subject Positions," in Rizzi, Luigi (ed.) , *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 115-165.
- Citko, Barbara (2008) "Small Clauses Reconsidered: Not So Small and Not All Alike," *Lingua* 118, 261-295.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to the Passive in English", *Syntax* 8 (2) , 81-120.
- den Dikken, Marcel (1994) "Predicate Inversion and Minimality," *Linguistics in the Netherlands 1994*, 1-12.
- (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, The MIT Press.
- Dictionnaire historique de l'ancien langage François* (1972)
- Heycock, Caroline (1995) "The Internal Structure of Small Clauses: New Evidence from Inversion," *Proceedings North East Linguistic Society* 25, 223-238.
- (2012) "Specification, Equation, and Agreement in Copular Sentences", *Canadian Journal of Linguistics* 57 (2) , 209-240.
- Huot, H  l  ne (1982) "Constructions infinitives du fran  ais: le subordonnant *de*", *L'information Grammaticale* 15, 40-45.
- Jaeggli, Osvaldo (1980) "On Some Phonology Null Elements in Syntax", MIT Ph.D dissertation.
- Jones, Michael Allan (1996) *Foundations of French Syntax*, Cambridge University Press.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, The MIT Press.
- Menshing, Guido (2000) *Infinitive Constructions with Specified Subjects: A Syntactic Analysis of the Romance Languages*, Oxford University Press.
- (2017) "Infinitival Clauses", in Dufter, Andreas & Elisabeth Stark (eds.) *Manual of Romance Morphosyntax and Syntax*, De Gruyter, 369-396.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1994) "Early Null Subjects and Root Null Subjects", in Hoekstra, Teun & Bonnie D. Schwartz, *Language Acquisition Studies in Generative Grammar: Papers in Honor of Kenneth Wexler from the 1991 Glow Workshops*, John Benjamins Publishing Company. 151-176.

- (2015) “Notes on Labeling and Subject Positions”, in Domenico, Elisa di, Cornelia Hamann & Simona Matteini (eds.) *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adrian Belletti*, John Benjamins Publishing Company, 17-46.
- Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A comparative History of English and French*, Kluwer Academic Publishers.
- (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press.
- Rooryck, Johan (1997) “On the Interaction between Raising and Focus in Sentential Complementation”, *Studia Linguistica* 51 (1), 1-49.
- Roy, Isabelle & Ur Shlonsky (2019) “Aspects of the Syntax of *ce* in French Copular Sentences”, in María, J. Arche, Antonio Fábregas, & Rafael Marín (eds.) *The Grammar of Copulas across Languages*, Oxford University Press, 153-169.
- Ruwet, Nicolas (1972) *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Éditions du Seuil.
- Sabatini, Francesco & Vittorio Coletti (1997) *DISC Dizionario Italiano Sabatini Coletti*, Giunti.
- Safir, Kenneth J. (1985) *Syntactic Chains*, Cambridge University Press.
- Trésor de la langue française* (1992) Gallimard.
- Shlonsky, Ur & Luigi Rizzi (2018) “Criterial Freezing in Small Clauses and the Cartography of Copular Constructions”, in Hartmann, J., Jäger, M., Kehl, A., Konietzko, A. & Winkler, S, *Freezing: Theoretical Approaches and Empirical Domains*, De Gruyter Mouton, 29-65.
- 上野貴史(2014)「小節構造における不定詞補部：再構造化構文における *di*-INF と  $\varphi$ -INF」, 『言語文化学会論集』第43号, 3-17.
- (2015)「イタリア語非対格自動詞補文の使用分布と統語構造」, 『広島大学大学院文学研究科論集』第75巻, 43-60.
- (2018)「イタリア語非対格動詞における補文の通時的変遷：古イタリア語の小節構造」, 『イタリア学会誌』第68号, 73-94.
- (2019)「イタリア語繰り上げ動詞・非対格動詞における基底構造の通時変化：小節構造分析における再述接語と虚辞代名詞」, 『歴史言語学』第8号, 1-40.
- (2020)「名詞述語文の小節構造分析：英語・イタリア語・フランス語の場合」, 『ニダバ』第49号, 11-20.
- 大野晃彦(1977)「動詞 *sembler* のシンタクスについて」, 『フランス語学研究』第11号, 1-29.
- 敦賀陽一郎(2011)「フランス語における動詞 *sembler* の属詞構文」, 『東京外国語大学論集』第82号, 299-330.
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」, 『日本語科学』第8号, 54-75.

## **The Attributive Construction of French *sembler* and Italian *sembrare*:**

A Quantitative Analysis of “Verbness” and “Copulanness”

Takafumi UENO

**Key words:** attribute, impersonal, intransitive, “Verbness,” “Copulanness”

This paper quantitatively investigates French *sembler* and Italian *sembrare*, which follow similar attributes, and clearly reveals where French *sembler* is different from Italian *sembrare*. Quantitative analysis demonstrates that the *sembler* construction differs from the *sembrare* construction in the “comparison” meaning, the verbs inside the impersonal construction, and the dative experiencer of the finite impersonal construction. I point out that while *sembler* has the property of “Verbness,” *sembrare* indicates “Copulanness.”